

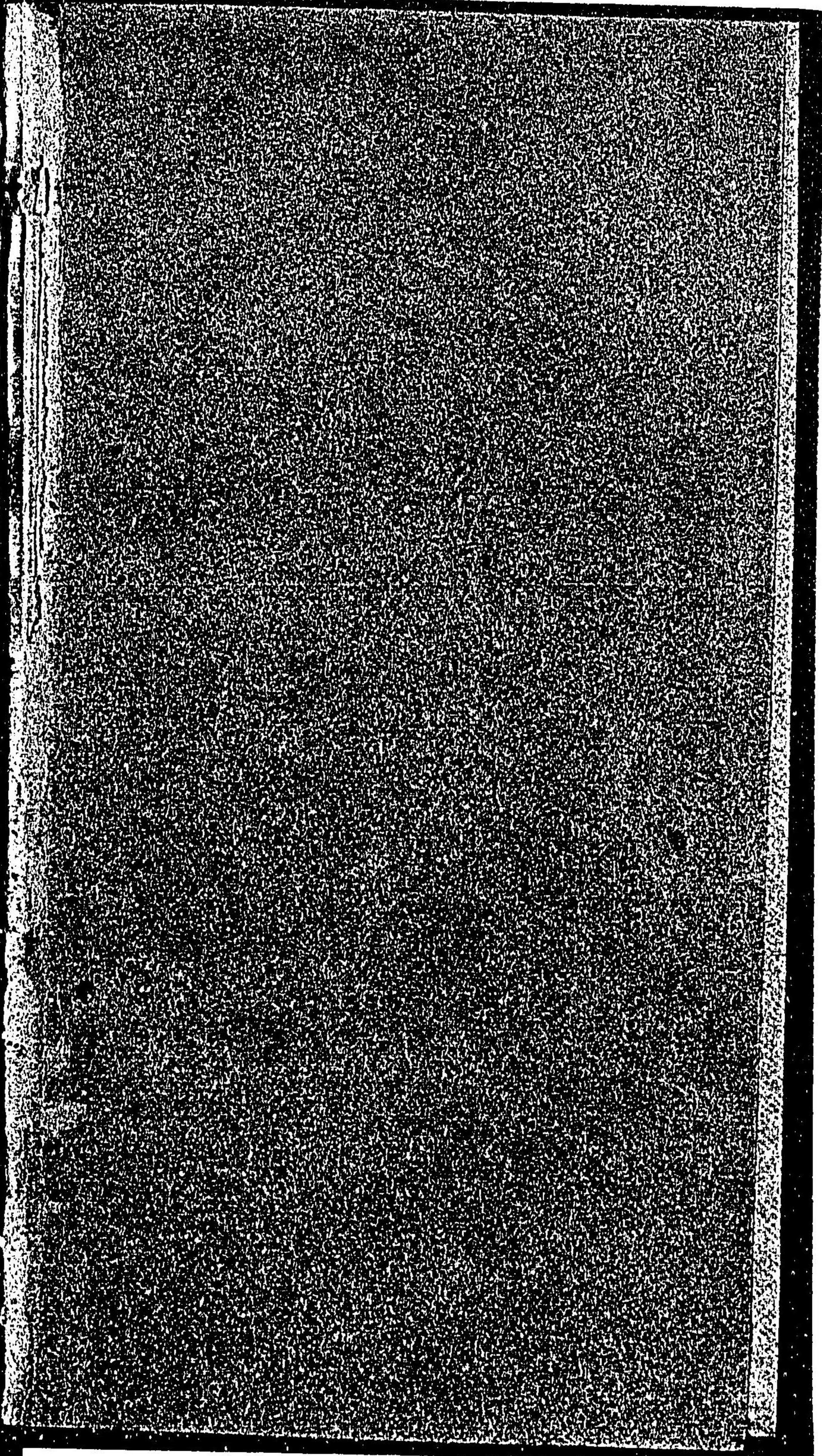
82  
576



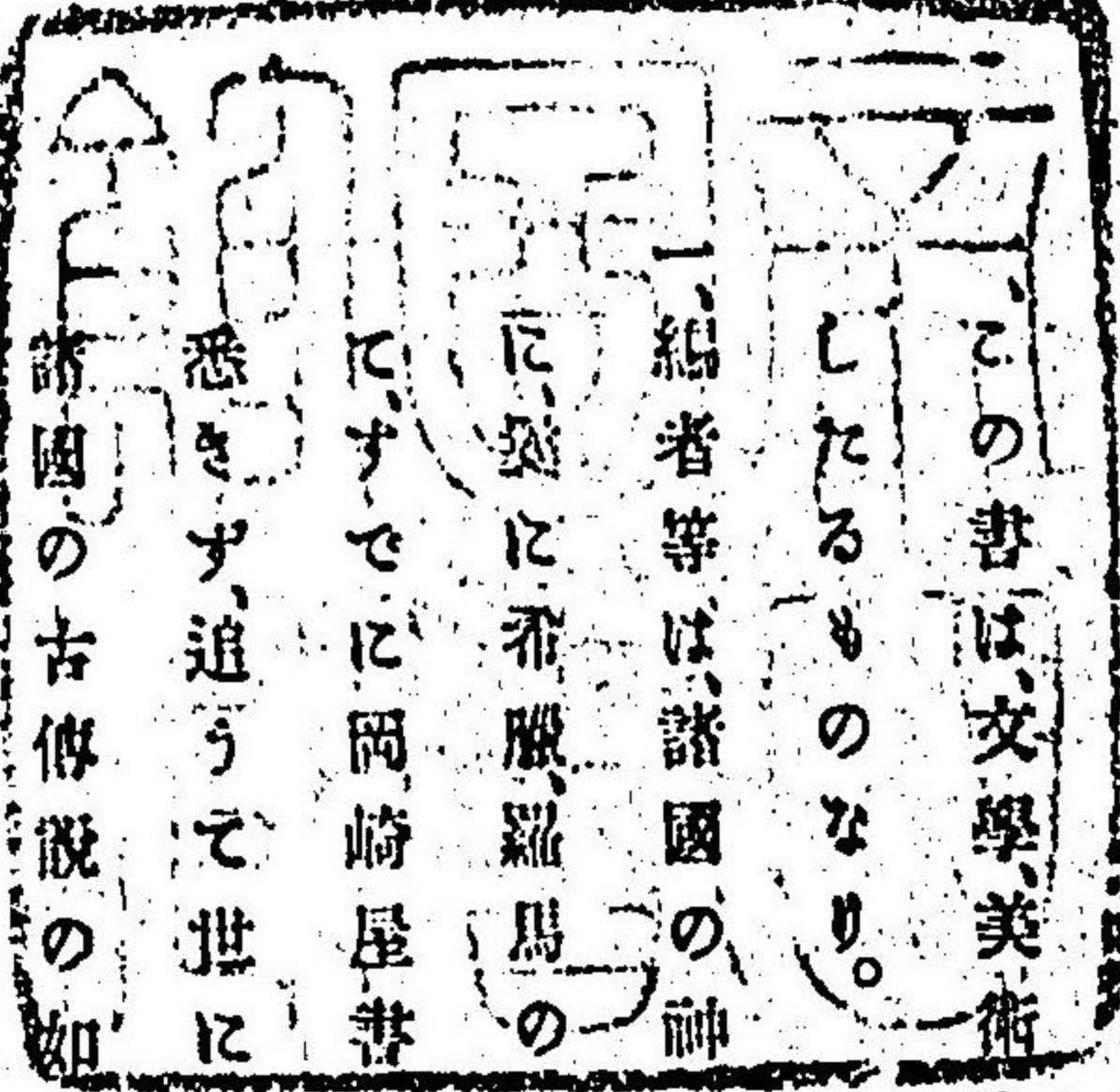
北歐神話

靈止

雨辟



21-506



緒言

この書は、文學、美術を研究せむとする者のために、北歐の神話をしたるものなり。

一、編者等は、諸國の神話、古傳説を、世に紹介せむと欲するものなり。茲に希臘、羅馬の神話梗概をもつし、「天馬」「蝴蝶」のを「とめ」と名け、すでに岡崎屋書店より出版しぬ。希臘、羅馬の神話も、なほこれに悉きず、追うて世に出たさむ口、近きにあり、埃及、墨西哥、その他、東洋諸國の古傳説の如き、また、遠からずして、諸君の一瞥を請はんとす。

一、この書も、さきの二書と同じく、その材料を、主として、Rev. E. E. Hale 氏が一八九四年に訂正増補して出版したる *Balfour's Mythology: The Age of* *III. 第二版及び一八九八年 See Foreman 會社出版の *Paganus* by Anderson*



L. I. D. 氏著 Norse mythology 第六版にとりぬ、こは、もとより、著者及び發行  
者の承諾を経たるものなり。

一、この書を編するに當りて、一方ならぬ力を與へられたるは、米國文  
學士 Rev. Cate. 君および、法學士ロ比野寛君、ロ箇原繁君、藤波剛一君、  
なり、こゝに、特書して、感謝の誠意を表す。

明治三十五年四月神武天皇祭の翌日、

名古屋に於て、

赤司繁太郎

石田元季

しるす

目次

目次

(一) 總叙	.....	一頁
(二) 天つ宮居	(フアルハラ <small>フアルハラ</small> の宮殿)	九
(三) 天鬨使	(アマハセツカヒ <small>アマハセツカヒ</small> フアルキリオル)	一一
(四) はたゝがみ	(トル、及他の神と)	一三
(五) 禍神	(マカヒ <small>マカヒ</small> 、及その三子)	二〇
(六) 妖魔匠	(ス、フアヂリフアリ)	二四
(七) 花嫁姿	(トリムとフレヤと)	二九
(八) 一日千秋	(フレ)	三三
(九) 巨人國	(トルとウトガルド、ロキと)	三六

O, ye delicious fables ! where the wave  
And woods were peopled, and the air, with things  
So lovely ! why, ah ! why has science grave  
Scattered after your sweet imaginings ?

Barry Cornwall.

- (十) 土いゝか.....(フルンダニル).....六〇
- (十一) やどり木.....(ハルツル).....六三
- (十二) 明暗.....八〇
- (十三) 世の終り.....八三



R. K.

ODIN.



THOR.



(一) 總叙

仰いで天を見ず、俯して地を見ず、こゝに深淵あり、杳渺として底を知らず、こゝに宇宙あり、渾沌として、たゞ朦朧なり。

宇宙朦朧として、おのづから一泉あり、滾々として沸いて歇まず、大河源を發するもの、その數、十二、流水遠く去つて、遂に凝り、山なす氷塊の白玉堆は、一層また一層、積んでかの底なき淵を埋めぬ。

赤司 嚼花 同編  
石田 春風

- (1) Scandinavian,  
 (2) Sweden.  
 (3) Denmark.

これはこれ<sup>(1)</sup>スカンディナヴィアの創世に關する傳説にあらずや、何ぞ、その壯大にして神秘なる、蓋し神秘はスカンディナヴィア人の特色なり。

- (4) Norway.  
 (5) Iceland.

歐洲の北國をなすもの、曰くスウエデン、曰くデンマルク、曰くノルウエー、曰くアイスランド、此等の國民を總稱してスカンディナヴィア人といふ。

- (6) Edda.

神秘は彼等の特色なり、而して、この神秘を表顯するもの、載せてエッダと稱する二部の書冊にあり、その古きものは詩篇として、一千〇五十六年に編せられぬ、その新らしきものは散文の形に於て、一千六百四十年に成りぬ。

- (8) Audhumbla. (7) Ymir.

いでや、再び、彼等の神秘なる古傳説を聽かむ。かの朦昧の世界より、南に當りて、そこに光りの世界ありき、この光世界、温風を吹き送つて、深淵の氷塊、ために溶けぬ、融ける氷は、英々として騰つて雲となり、是處に霜の巨人イミルとその子孫と生れ、巨人のために乳を供する牝牛、名はアウドフムブラ、亦、生れぬ。さて、その牝牛は、氷より霜と鹽とをあさり嘗めて、以て自から養ひぬ、しかるに、一日、例の鹽石を嘗めつゝありしが、先づ、人の毛髮現はれ出で、第二日には全頭あらはれ、第三日には、美と敏捷と勢力とを賦與せられたる全身あらはれ出でぬ。この新しく生り出でたる神は、巨人族の女をめとり、三人の子



(9) Odin.  
(10) Vili.  
(11) Ve.

(12) Midgard.

を擧ぐ<sup>(9)</sup>オデイン<sup>(10)</sup>、フイリ<sup>(11)</sup>、フエ、是なり。  
彼等は、巨人イミルを殺し、その體軀より地を造り、その血潮より海を造り、その骨より山を造り、その髪より樹木を造り、その頭蓋骨より天を造り、その頭腦より雲を造り、そをして霞と雪とを運ばしめ、その眉毛より<sup>(12)</sup>ミッドカルド即ち中地を造り、そを以て人類の住處となしぬ。  
かくて後、オデインは天に日月を懸け、晝夜を分ち、四時を定め、彼等をして、各任を盡さしめぬ、日は光を放ちて地を照し、草木をして發芽、成長せしむ。  
諸神、世界を創造せし後、海邊を逍遙して、なほ事業に缺くる所

(13) Aske.  
(14) Embla.

あるを見出でぬ、何ぞや、曰く人類の棲息せざる事これ也。  
されば、諸神は<sup>(13)</sup>秦皮樹<sup>(14)</sup>をとりて男を造り、赤楊を取りて女を造りぬ、男の名はアスケ、女の名はエムブラ。オデインは彼等に生命と精神とを賦しぬ、フイリは理性と運動とを賦しぬ、フエは五官と感情表出の方法と言語とを與へぬ、ミッドカルドは彼等が住居の場所となりぬ、かくて彼等は人類の始祖となりぬ。  
人類の始祖に關する古傳説右の如し、吾人はなほ進んで、スカンデナヴィヤ人が宇宙の位置につきて、考ふる所を聽かざるべからず。

(25) Valhalla. (24) Bifrost.

(23) Nidhogge.

ヨーツンハイムの傍に在る泉は、イミルの井にして、智慧と才能と、潜みてあれど、ニツフレハイムの泉は、蝮蛇を養ひ、毒蛇ニドホ、ゲ(暗黒)常に樹根を噛む、また、四匹の牡鹿ありて、枝上を馳り、その芽を咬む、四匹の牝鹿は、四風を表す、樹下にはイミル横り、身を動かす毎に大地震盪す。

アスガルドは神々の住む處の名なり、こゝに赴かむとせば、只天地間に架する<sup>(24)</sup>ビフロスト、即ち虹のかけはしに依るの外なし。アスガルドには、黄金の、白銀の宮居、數ありて、神々の居に用ひらる、就中、最も美しきは、オデインの宮居、<sup>(25)</sup>ファルハラなりとす。オデイン、その高御座<sup>(25)</sup>にある時は、一望、天と地とを觀る

(20) Urdur.

(21) Vardandi.

(22) Skuld.

(17) Jotunheim.

(18) Niflheim.

(19) Norns.

(15) Ygdrasil.

(16) Asgard.

スカンヂナ、ヴェイヤ人は、巨大にして、勢力ある、秦皮樹<sup>(15)</sup>イグドラシルありて、全宇宙を支持すと想像しぬ、この秦皮樹は、もと、イミルの體より生じたるものにして、鉅多の根は、三界を貫く、第一根は<sup>(16)</sup>アスガルドに擴がり、神々の住居たり、第二根は<sup>(17)</sup>ヨーツンハイムに入り、巨人の住む處たり、第三根は<sup>(18)</sup>ニツフレハイムに入り、暗黒と寒冷と、こゝに潜めり、さて、是等三根の傍には、各々泉ありて、その根を濕せり。アスガルドに入れる根は<sup>(19)</sup>ノルンによりて、守護せらる、ノルンは運命の配布者なりと考へらる、三人のノルン女神とは、一に<sup>(20)</sup>ウルツル(過去)、二に<sup>(21)</sup>フェルグンデイ(現在)、三に<sup>(22)</sup>スクルド(未來)これ也。

- (26) Hugin. (27) Munin. (28) Geri (29) Freki. (30) Runic. (31) Wodin. (32) Wednesday.

べし、彼の肩の上に二鴉あり、<sup>(26)</sup>フギン、<sup>(27)</sup>ムウニンといひ、日毎に、晝は全世界に翺翔し、歸りてはその見聞せる所をオデインに報ず、さて又、彼の神の足下には二狼のあるありて、<sup>(28)</sup>ゲリ、<sup>(29)</sup>フレキと稱し、オデインは、おのれに供せられたる食物を彼等に與ふ、オデインは食事を爲すことなれば也。

オデインはまた、<sup>(30)</sup>ルーニク文字を創めぬ、運命の古文字を鑛物の質に彫むはノルン等が務めなりとす。

オデインの名は、<sup>(31)</sup>屢々オデインと綴らる、今用ひる所の、週の第四日の名稱、<sup>(32)</sup>エンズデイ(水曜日)は彼が名稱より來れるなり。

## (二) 天つ宮居

(フアルハラの宮殿)

フアルハラはオデインの住みますところ。壁にかけたるは、黄金づくりの鎗、黄金づくりの楯、黄金作りの甲、目もあやに神々しく、きらめきわたれり。

地上に在りて、平和に死にし者どもは固より、こゝに來る事だに許されず、たと、戰場に、勇しき死を遂げたる武者の魂のみ、迎へられて、饗應の筵につらなる事を得るなり。

およそ、世に、このフアルハラの宮居の有様ばかり、都合よきはあらし。

(1) Schrimnit

(2) Heidrun.

まづ、饗膳に用ひらるゝ野猪<sup>(1)</sup>シユリムニルの肉は、朝毎にきり去られて、夕に、また、もとの如く肥満すとか、飲料は、牝山羊<sup>(2)</sup>ハイドルンの乳なるべし。彼等勇士は、宴に侍せざる時は、戦ひを以て樂みとし、あるは園に出て、あるは野に出で、寸斷せらるゝまで格闘す、これ、彼等が上なき愉快なり。しかも、食事の時來れば、その創痕、おのづから、直に癒えて、姿ゆゝしく、また、フアルハラ<sup>(3)</sup>の宮に集ひ來るとなむ。

(1) Valkyrior.

三 天馳使<sup>(4)</sup>

(フアルキリオル)

甲に、冑に、奇しき光を放たしめつゝ、堅楯、長槍、馬に跨る<sup>(1)</sup>フアルキリオル<sup>(2)</sup>て、ふ處<sup>(3)</sup>女たちの武士<sup>(4)</sup>姿こそを、しけれ。フアルハラ<sup>(5)</sup>の宮居に、數多の勇士を集へ、最後の争闘來らむ日に、巨人に敵する事を得むと望めるオデインは、使者として、彼等フアルキリオルを戰場に送り、戦死者中の勇者をえらびて、その歸り路を導き來らしむるなり。フアルキリオルとは、その名に於て、既に撰死者<sup>(6)</sup>のこゝろを有す。

(2) Mjölmir. (1) Thor.

(3) Gray (2) Aurora Borealis

(4) The Fatal sisters.

彼等が馬を驅つて、北方の空高く馳するや、その武器は輝きわたり、電光はげしう遠近に飛ぶ、北方の人は呼んで、アウロラ、ボレアリス、即ち北光とぞいふなる。  
かの詩人グレイが運命の姉妹てふ詩は、實に、この傳説に基きて作りしものなり。

(四) 霹靂神

(トル、および他の神々)

雷神<sup>(1)</sup>トルはオデインの第一子にして、神人の中にありて、最も強きものと稱せらる。

彼はかしてむべき、貴ぶべき三つのもを有す、第一のものは、その槌<sup>(2)</sup>ミエルニルにして、一たび空中にひらめく時は、霜の巨人、山の怪物ども、悉く震慄せざるはなし、これ、その槌は、トルが意のまにまに、當る所すべて破れ、巨人の父祖と子孫と、また、その破壊を免れざればなり、第二のものは力の帯にして、一たびこれを纏ふ時は、彼の神力、つねに優る事二倍に至る、第三のも

(3) Thursday.

(4) Longfellow.

のは、これまた、いと貴ぶべき鐵の手袋なり、もし之を穿ちて鐵槌を揮はむか、破壊の業實に易々たるを見るなり。

トルの名は、今週の第五日、即ち木曜日(3)の始源たり。

ロングフェルロー歌つて曰く、

"I am the God Thor,

I am the War God,

I am the Thunderer!

Here in my Northland,

My fastness and fortress,

Reign I forever!

"Here amid icebergs

Rule I the nations;

This is my hammer,

Miørner the mighty;

Giants and sorcerers

Cannot withstand it!

"These are the gauntlets

Wherewith I wield it,

And hurl it afar off;

This is my girdle;  
Whenever I brace it  
Strength is redoubled!

"The light thou beholdest  
Stream through the heavens,  
In flashes of crimson,  
Is but my red beard  
Blown by the night wind,  
Affrighting the nations!

"Jove is my brother;  
Mine eyes are the lightning;  
The wheels of my chariot  
Roll in the thunder,  
The blows of my hammer  
Ring in the thunder."

Tales of a Wayside Inn.

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

(5) Frey.

(10) Heimdall.

(8) Bragi.

(6) Freyn.

(9) Iduna.

(7) Elves.

フレ<sup>(6)</sup>ー、また、神々の中に著る、彼は雨をおさめ、日光を司り、及、地上なる菓物を總轄す。

彼の妹フレ<sup>(6)</sup>ヤは、女神中に於て、尤も親切なるもの、音楽を愛し、春を愛し、花を愛し、殊に<sup>(7)</sup>エルフエ(仙女)を鐘愛す、この女神は、た、愛歌を好むが故に、世の戀人、多く、これに祈る。

ブラギ<sup>(8)</sup>は、詩歌の神にして、彼の歌、多くは勇士の功績を記す、その妻<sup>(9)</sup>イヅナ女神は、箱に林檎を藏し、神々の老衰を感ずるものある毎に、その林檎を味はしめて、再び彼等を若返らしむといふ。

ハイムダル<sup>(10)</sup>は、神々の守護をなし、ビフロスト橋(虹)の上におゐて、

巨人等が天界に来るを防ぐなり、その眠ること鳥よりも軽く、夜も晝に同じく一望周圍一百哩程をのぞむべし、耳の聰なるは、若草の萌え出で、羊毛の生<sup>お</sup>ひ出づるをも聞く事を得べく、彼の携ふる大なる喇叭は、一たび之を吹けば、天地も爲めに震撼す。





HERA.

- (2) Fenris.  
 (3) Midgard.  
 (4) Hera.

(1) Loki.

(五) 禍神

(ロキ、および、その三子)

奸譎讒誣、至らざる所なく、害悪反逆罪を神々の間に醸すと考へらるゝ悪神あり名をロキ(1)といふ、容貌端麗、風采嫺雅、しかも、その性、渝り易く、その質、まことに兇悪なり。

彼はもと、巨人より生れたれど、自ら神々の群に侵し入りて彼等と伍し、機才巧智を弄して、彼等を陥れ、自ら以て娛みとす。

ロキに三子あり、狼(2)、フエンリスはその第一子、蛇(3)、ミドガルドはその第二子、死(4)、ヘラはその第三子、皆兇険なり。

なべての神々は、これ等の怪物、やがて、成長するに至らば、神人

に蒙らざる危害測るべからざるものあらむ事をさとらざりしが、流石は、神々の中にもその神ありと知られたるオデイン、使をロキに遣りて、その子等を、我が傍に致さむことを勧めぬ。この時、オデインは、蛇をとりて、之れを、地をめぐれる深淵の裡に投じぬ、されど怪物は益成長し、おのが口もて、自からその尾を脚み得るに至り、遂にその身を以て、全地を纏ひぬ。オデインは、またヘラをニツフレハイムに投げぬ、彼處にて、彼女は九界を司配し、彼女に送られたる病死者と老衰者とを分ちぬ。彼女の宮殿は、エルフイドニルと稱せらる、飢は食卓にして、餓はナイフなり、延引は僕にして、緩慢は婢なり、斷崖は彼女の入

口にして、配慮は彼女の臥床なり、而して、その空の裝飾は、もゆるが如き心配なり。かくて何處よりも、直に、彼女は認めらるべし、その肉體は、半肉色にして、半は蒼白、恐るべき嚴格と峻烈なる容貌とを有すれば也。

フエンリスは、その縛めらるゝに先ち、久しく、神々を苦めたり、彼は如何ばかり堅牢なる桎梏をも、蛛網の如くにかき破りぬ、されば、神々も山祇（まつかみ）に使を遣して、グライプニル（6）てふ鎖をつくらまく乞ひぬ。今少しく、その鎖につきて述べむか、實に件の鎖は、六つのものより成れりき、その音は猫の足音、その敏き事は熊の敏捷、その外、女人の毛髮、魚の呼吸、石の根、鳥の唾液、これ

也、さて、その成りたるを見れば、恰も、絹紐の如し。神々たち、狼にむかひて、軟ならむ紐して束ねむといふや、かれフエンリスは、神々の詭計を疑ひ、魔術もて造られたらむと恐ぢ怖れぬ。

こゝに於て、刀神（7）チルは、彼の疑を解かむために、手をその口に入れぬ、この時他の神々は、グライプニルを以て彼を縛め了（おは）はんぬ。フエンリス、その破れざるを知るや、激怒してチルの手を噛み切りつ、されば、チルはこの後、片手となりはてぬ。

(六) 妖魔匠

(スファデルフーアリ)

何時いつの事にかありけむ、神々たち、宮居を築きて、ミドカルド、および、フアルハラフアルハラの工事、また了らむとする頃なりき、一名匠あり、來り告げて曰く、われ、神々の爲に、霜の巨人等も、山の怪物等も、決して犯すべからざる堅牢安固の住處を建立せむと欲す、若し、功成らば、賞として、女神フレヤと日月とをたまはらむ、神々、われに許さむやと、神々答へて曰く、汝若し他の助を仰が、その全工事を、一冬期に終了せば、誓つて汝の請を容れむ、然れども、夏の初日、來りて、なほ、一事の功をおへざるものあらば、報

(1) Svadilfari.

酬は汝の手に歸せざるべしと、こゝに名匠は、唯、彼の馬(1)、スファデルフアリのみ、わが事を助けむと請ひぬ、この請は、ロキの勸告によりて許され、初冬の第一日、いよいよ、工事に着手しはじめぬ。彼は、夜間、その馬をして、建築の石材を牽かしむるに、石材の巨大なること、神々も一驚を喫し、この馬こそ主人よりも、多くの工事をなすべけれと疑はれぬ、されど、馬を用ひるの條件は、既に容されぬ、かくて、嚴格なる誓約は確立しぬ。この契約を締むし、巨人の意は、若し、これなくば、神々の中に、安全に働くこと能はざるべく、殊に、トルが遠征より歸り來らば、必や、惡鬼に對

して、その破壊力を逞しくするならむと恐れられたれば也。冬も  
將に終らむとして、建築はますます功をおふるに近し、今や、大  
厦蒼空に聳え、高樓中天を磨す、こゝに夏前三日を費さば、工事  
の成らむこと、いと易かるべくと見えたり。

故れ、神々は裁判の座に集ひて、フレヤを與へ、日月を運び去ら  
れて、黑暗々裡に諸天を殘し、巨人等の侵入を恣にせしむるこ  
とを勸めしは、誰なるべきかと尋問せり。

彼等神々皆一致して曰く、これ、諸々の惡事至らざる限なきロ  
キに外ならざるべしと、されば、彼ロキにして、かの名匠の工事  
を妨げ、かねての約を履まざらむやう勉むる所なくば、與ふる

に、殘忍なる死を以てせむと判めぬ。

かくて、神々は、ロキにせまりければ、ロキはをのゝき怖れて、名  
匠の功を遂げしめじと誓ひぬ。

こゝに、かの匠人は、石材を探らむと欲して、名馬スファデルフ  
アリを導き、森に到りしをりしも、一頭の牝馬、木蔭より跳り出  
で、一聲高く嘶きければ、名馬は、手綱を切りすて、牝馬を追ふて  
森の方に馳せ去りぬ。名匠もまた馬をしたひて馳せ、空しく  
一夜を經過しつ、されば、工事は前日に異ならず、馬は已に行方  
を失ひ、工事は今や撻取らむやうなし、彼の名匠もせむ術盡き  
ぬ。せむ術盡きて、彼は乃ち、その正體をあらはしぬ、神々、初め

て、明に、山の巨人が、自ら姿を變じて、彼等の間に來りしなる事を知りぬ。

約を守らむ要なければ、神々、やがて、トルを招くトルは神々のために、その鐵槌を揮つて、彼の名匠にしたゝかの報酬をとらせぬ。

日月を以て得べかりし報酬は、恐しき賞賜となりて、彼は頭蓋骨を粉碎せられ、遂に、ニツフレハイムにおくられをはんぬ。

(七) 花嫁姿

(トリムとフレヤ)

何とかしたりけむ、ある時、トルが寶の槌、過つて巨人<sup>(1)</sup>トリムの手に落ちぬ、トリムはこれをヨーツンハイムなる巖石の下、八爪の底に埋めぬ。

かゝりければ、トルは大に驚き、ロキを遣はし、トリムに譏りて、彼の槌を取り戻さむとするに、トリム之を聽かず、曰く、若しフレヤを得て妻となすべくは、喜んで武器を返さむと、ロキ還つてその意を告ぐ。

されど、フレヤは、霜の巨人等が王なる、トリムに想はるゝてお

事をだに、恐れをのゝく程なれば、素よりその意を容るべくも  
あらず。

フレヤ行かずんば、武器は返らじ、フレヤを遣さむか、これ亦至  
難の業たるを如何にせむ、今はトルも進退これ谷りぬ。

その時、ロキがトルに勸めて言ふやう、御身自らフレヤの衣を  
纏うて、われに伴ひて、ヨーツンハイムに赴き、とかくの謀をめ  
ぐらし給へと、トルこれに従ひぬ。

かくて、トリムは美しき花嫁の覆面ゆかしく、來りしを見て、嬉  
しき譬へむ方なく、禮を盡して、これを迎へぬ。

されど、トリムが先づ一驚を喫せしは、花嫁が八尾の鱗と、大き

やかなる牡牛一頭を食ひ、なほその他の珍味の數々に腹を鼓  
しつゝ、およそ食物の三噸ばかりを、平然として食ひし事これ  
也、トリム怪み呆れて詞を發せず、乃ち、ロキは辨明していへら  
く、こはこれ、花嫁がヨーツンハイムの主權者たる彼女の戀人  
を見むことを願うの心切に、この八日間、一指を食物に觸れざ  
りしかば、かく健啖におはすなりと。

トリムはこの辨解に飽かず、かの帕かほの下より、花嫁の顔を覗き  
込みぬ、然るに花嫁の眼光は電の如く人を射て、あまりにおそ  
ろしければ、なほもいと不審なる面色おもてなるを、ロキが再び前の  
辨解を繰り返すに、やうやう安堵の意を起しぬ。

かくてトリムは從者に命じて、寶の鐵槌をフレヤの膝上に置  
かしめぬ。こゝにトルはその覆面を脱し、假裝をかなぐりすて、  
槌とり上げて、勇氣平日に倍しつゝ、トリムとその從者等を殺  
戮しおはんぬ。

(八) 一日千秋

(フレイ)

フレイ曾て、全宇宙を見渡すべきオデインの玉座に上りぬ。  
かくて、遙に巨人の王國を望むに、一婦人あり、竊窺として、美し  
き事物に比ぶべくもあらず。この時より、フレイはいたく物  
おもひに沈みて、何となううら悲しう、ぬばたまの夜もいねが  
てに物も食はず、語る事さへ稀になりゆきぬ。  
こゝに、彼の使者スキルニルは、<sup>(1)</sup>いたく心きゝたる者なりけれ  
ば、よく主人の切なる意中を解し、若し賞として彼の劍を賜は  
ば、慎みて美人を迎へまゐらせむと言ひ出でぬ。フレイはい



かでか喜ばざらむ、直にこれに應じて、その寶劍をとらせぬ、さて、スキルニルは使に立ち、巨人の王國に下りゆきて、事の仔細を告げ、やうやく、彼の婦人より、來む九夜の中に、しかぐの場所にて、フレイと婚すべき約束を得てかへり來りぬ。

フレイが使の歸り來らむ程を待ちぬし心地、實に千秋の思なりけむこと、かく叫びたるにても知るべし。

"Long is one night,

Long are two nights,

But how shall I holdout three?

Shorter hath Seemed

A month to me oft

Than of this longing time the half."

フレイは、やがて、總ての婦人中に、最も美しきゲルダを得たり、されど、千軍萬馬を塵にすべき彼の利劍は、再び彼に返らざりき。

(1) Thialf.

(九) 巨人國

(トルとウトガルド、ロキと)

ある日、雷神トル、チアルフイ、ロキの二僕と共に、巨人の國へ旅立ちぬ。チアルフイは、總ての人の中にも、最も駿足なる者なるが、この時、彼はトルの風囊に食糧を盛り、此を肩にして隨ひ行きぬ。

かくて、主従三人、途を急ぐ程に、その日も將に暮れむとしければ、とある深林の中に入りて、一夜の宿りを爲すべき處を、求むるに、たまたま、一の巨穴あり、その入口を見れば、幅は、全く、ある建築物の一方面を開放したらむが如くなり、主従は取り敢へ



HAMMER STRIKES.

す、この裡に眠りの枕をとりぬ。

さる程に、夜も深更に及びたるをりしも、トルは全建築物を震盪する地震によりて目を覺され、驚きて友を呼び、以て安全の地を求めむとせり。

こゝに、主従が眠りに就きぬし處の右手（右）に當りて一室あり、彼等は之を見出でたれば、とりあへず、皆こゝに跳び入りぬ、只、トル一人は、その入口に在りて、鐵槌を握り、身構へしつゝ、用心をさをさ怠りなきに、恐しき呻吟の聲、夜もすがら聞えぬ。天、あけゆけば、トルはその宿りを出たるに、其處に近く巨人の熟睡して、鼾聲雷の如きを見て、前夜の呻吟のこゝより聞えしこと

を覺りぬ、されば、トルは彼の槌を用ひむかと思ひ感へるをりしも、件の巨人目を開きしかば、止むを得ずして、その名を問ひぬ。

巨人答ふるやう、

『わが名は、<sup>(1)</sup>スクリミルなり、われは御身に問はざれど

も、御身がトル神なる事を知る、されば、御身はわが手

袋を何とかしたまひつる。』

こゝに於てか、トルは初めて、彼等が前夜の宿りは、巨人の手袋にして、二人の従者が逃れ入りし室は、その拇指なりし事を知りぬ。

やがて、スクリミル、彼等と旅行せむ事を乞ひしかば、トルは之を許して、先づ共に朝飯を喫し、後、スクリミルをして、その食物を一の風囊に入れ、肩の上になひつゝ、先導をなして進ましめぬ。スクリミルは足の長きにより、その歩みの疾き事、到底三人のものゝ、跟随を許さず、辛うじて一日の行程を了へ、漸く日も暮れ果てければ、犬樹の下に宿りを定めぬ。

スクリミル、三人の主従に、

『われ、御身等に先ちて眠るべければ、御身等はこの風

囊を開き、晚餐を準備せらるべし。』

と告げて、寝に就きぬ、と見る程に、やがて熟眠して、鼾聲雷の如

し。

トルは晚餐を整ふべく、風囊を開かむとするに、巨人が堅く束ねたれば、百方力を盡せども之を解く能はず、終に堪へかねて、憤り心頭より發し、鐵槌を諸手に攫むや否や、巨人の眞向めがけて打ち下せり、この時、スクリミル目を覺して、只平然と、木葉わが頭上に落ちたりや否や、御身等は未だ晚餐を喫し了らざるか否やをのみ問ひぬ、乃ち、彼等も亦眠らむとする事を語るや、巨人は他の樹下にゆきて眠りぬ。

トルは少しもまどろむ事能はず、スクリミルが再び鼾聲を出すや、竊に起き上り、例の槌をとりて、頭蓋骨に凹處を生せむ計

り、全力を込めて打ち下しぬ。

スクリミル、目を開きて、

『何事ぞや、この樹には、恐くは、鳥の宿れるにはあらじ

か、わが頭上に、樹枝の落ち來りぬと覺ゆ。さて、御

身は、いつまでも眠り給はぬか。』

トルは驚きあわて、

『今、目を覺しつるが、まだ、夜中なれば、睡眠の時はある

べし。』

とのみ答へつ。

かくて、心中、機會あらば、この度こそは、必ず、事を定むべけれと

決心せるに、天明の前、又もやスクリミルは熟睡して、軒聲雷の如し、こゝに於てか、トルは一心を槌に込めて、頭も碎けよと打ち下せり、されど、スクリミルは、只、起き上り、その頬を撫で、

『樞の實わが頭上に落ち來れり、あゝ、トル、御身覺めたるか、われ思ふに今にや起き出で、衣服を整ふる時なるべし、<sup>(2)</sup>ウトガルド市も此處よりは程遠からず、われは御身がわれをさして、巨大なる人よと囁くを聞きぬ、さはれ、かのウトガルドに到らば、われにも勝ち、巨人を見給ふべし、御身彼處に行かば自ら強しと思ひあがり給ふ可からず、<sup>(3)</sup>恐くは、ウトガルド、ロキの

從者等は、矮少なる御身が誇負を許さざるべし、御身等は東へ向ふ途をとるべし、わが途は北方なれば、こゝにて袂を別つべし。』

と云ひつゝ、おのが風囊を肩上に投げ上げて、彼等に別れ、森の中にわけ入りぬ、トルはかゝる人と道づれとなるを好まざれば、再びこれを止めむともせざりき。

かくて、トルの一行は、行き行きて、日も午に迫りぬ、ゆく手を眺むれば、とみる平原の中央に一市あり、高きこと、仰がされは、その頂上を視るべからず、さて、其處に到れば、大なる宮殿ありて、戸の開かれたる有様は、恰も一行を迎ふるものゝ如し、されば、

直に、進み入るに、數多の巨人等、椅子を運ねて、客室に並み居たり、なほ進みゆけば、前面の玉座に容儀殿めしう、王ウトガルド、ロキの座せるあり、一行は恭しく彼等が前に拜しぬ。  
この時、王は冷に笑ひて、

『真先に進みたるは、トル神なりと見るは、僻目か。』  
と呟き、さて又、トルにむかひて曰く、

『おもふに、我身は見かけよりも剛なるべし、御身および御身の一行が、最も秀でたる業は何ぞ、こゝは、一人たりとも、一藝に秀でざるもの、止まるを容さざればなり。』

と、ロキ進み出で、

『さん候ふ、させる藝能とてはなけれども、物食ふ事の早業は、誰にも劣らじと覺ゆるなり、われと思はむ人々は、こゝに出で給へかし。』

ウトガルド、ロキは、

『實に珍しき業に妙を得たるものかな、若しその言葉に偽りなくば、さこそ一興ならめ、いでや對手を出だしまをさむ。』

とて、遙に隔る椅子に坐せる某に、疾く疾く來よと命じたり。  
この對手は、その名を<sup>(4)</sup>ロギと呼び、素より、さる方の名人とて、聞

え高き者なりしが、日比の熟練を試みむとて、靜々と歩み來りぬ。

さて、用意には、肉を満てたる一槽を床上に置き、一方にはロキ、他の一方にはロギ、相對して座し、相圖を待ちて食ひ初め、槽の半に至りて、競争を止むる事と定められぬ。

さて、相圖遅しと、互に劣らぬ早食の秘術を盡し、いづれをいづれとも見えざりしが、ロギは只、槽中の肉をのみ食ひ果つる程に、その對手は既に肉と骨とを平げ、加之、槽をさへに食ひつゝしぬ、されば、競争は、あはれ、ロキの敗北となりぬ。こゝに於てか、ウトガルド、ロキは、今一人なるトルの伴人に、御身は何を爲

すべきかと問ひぬ、チアルフイは、よく我に敵するものあらば、共に競走をこそせめと申し出でぬ。

王ウトガルドは、やがて、これを諾して、さるべき壯俊わかしらどもを催し、競走にしも、倔强なる平原にぞ赴きける。こゝにて、彼等巨人中より、<sup>(5)</sup>フギフギてふ壯俊を撰み、これをしてチアルフイと競走せしめぬ。さはれ、フギの神速なる、いかで、チアルフイ等の企て及ぶ所ならむや、チアルフイの將に進まむとするや、あだかも、フギの還り來るに會しぬ、あはれ、これも亦こなたの敗に歸しをはりぬ。

かくて、また、ウトガルド、ロキはトルに向ひ、御身は何を爲すべ



きかを問ひぬ、トル答へて曰く、何にてもあれ、飲みわざに於て、われに敵するものあらば、業を比べ申さむ。ウトガルド、ロキ、乃ち彼の従者等が、饗應の法規を破りて、罰せらるるに當り、必ず飲み乾さざる可らざる大角盃を持ち來らしめぬ。侍者心得て、その角盃を持ち來り、トルに捧げたる時、ウトガルド、ロキ、トルに向ひて、いふやう、

『最もよく飲むものは、只一口にて、その角盃を飲み乾すべし、常人は二口を要す、最も弱き者にては、三口にてこれを飲み乾すべし、さて、御身の飲まむやうは、いかに。』

トルは盃を見るに、其の形長けれども、未だ甚しく巨大なりと稱するに足らず、必らず半口にてこそ飲み乾すべけれど、折しも渴を覺ゆるまゝに、その唇に當つるや否や、一息長くこれを吸ひぬ。かくて、試にその中を検するに、只僅に少量を減じたるのみ、こは失策たりと、こたびは深き呼吸を用意し、口を角盃に當て、満身の力を込めつゝ、飲めども盡きぬ盃は、なほ、以上に異りたりとも見えす。

これを見たるウトガルド、ロキは、

『いかに、トルよ、御身も今は傲ること能はじ、若し三度目に飲み乾さむとせば、深き呼吸をなさざる可から』

す、餘の儀はおきね、この業をもて察するに、御身は、こ  
こなる人々より、剛勇なりといふこと能はじ。』  
と思ふが儘に嘲りたり。

悪き王が嘲弄に、トルは満面朱を滲ぎつゝ、激怒の餘り、三度、角  
盃をとりて、これを飲まむとせしが、されど、量は殆ど前に異な  
らず、もはや、試みん勇氣も抜けて、悄悄、その盃を侍者に返しぬ。  
ウトガルド、ロキ、聲を放ちて、

『今少し剛の者かと想ひつるに、さてさて、弱き御身よ  
な、こゝに在りては、とても、われ等の賞讃を博すべき  
業をなすこと能はじ、されど、若しなほ爲すべき事あ

らば、疾く語りきかせよかし。』

トル、

『さらば、なほ新らしき業をもとめむとか。』

ウトガルド、ロキ、

『こゝにはかなき遊戯こそあれ、われ等の處に於ては、  
童より外に、なすものもあらねど、御身にせさせまく  
思ふなり、即ち、猫を地より扛おぐることは是なり。』

と、語未だ終らざるに、一の大なる灰色の猫、客室の床上に跳り  
來りぬ、トルは猫の腹部に、その手を置き、床よりこれを扛おげむ  
とするに、猫は體を延ばし、かば、一足あかりて、他は動かすト

ルは力及ばで、最早試みむとの心さへ起らざりき。

ウトガルド、ロキ、いへらく、

『今は御身の手並も知りぬ、猶は大なり、されど、トルはわれらに比ぶれば、數ふるにも足らぬなり。』

トル、答へて曰く、

『數ふるに足らずと言は、言へ、誰かある、わが怒りに敵して、われと力を角<sup>つ</sup>べむものは。』

ウトガルドは椅子にかゝれる人々を見まはし、

『御身と力を角<sup>つ</sup>べむものは知らねど、こゝに<sup>(5)</sup>エルリてお姥あり、おそらくは御身に敵するに足らむ、かれは

御身よりも強き多くの人々を投げ倒すなり。』

と、この時、齒さへ殆ど抜け果てたる老婆一人、寄室に入り來りぬ、ウトガルド、乃ち、彼にトルを投げたふさむことを命じぬ、トルは五體に力を満たして、老婆をつかめど、老婆は益々堅く立ちて、些も揺かず、終に非常なる苦辛の後、やうやく膝下に引き据えたり、時既に晚く、トルが新しき對手となるものも無かりければ、王はトルの一行をして客室を去らしめ、席を與へて、樂しく一夜を過さしめき。

翌朝早く、トルの一行は衣服を整へ、離別を告げむとするに、ウトガルド、ロキ、從者に命じて、佳着珍味を饗し、美酒を捧げしめ

ぬ。食事終りて、王は自ら市門の外に送り、別れに臨みて、われ等より強き者に會せし事ありや否やを問ひぬ、トルはこれに答へて、この行こそ、まことに、いみじき耻辱には遇ひたれといひ、なほ、つけ加へて、

『就中、堪へぬばかり口をしかりしは、御身がわれを呼びて、數ふるにも足らぬ者と嘲りしにあり。』

とウトガルド、これに應じて、

『否とよ、今は眞まことを御身に告げまゐらせむ、そは、御身が、今、市門の外にありて、復たわが王國に來らざるべきを信ずればなり。』

實に、御身は、われ等よりも、すぐれたる力を有し給ふなり。われ、また、御身が怪力を知らざりせば、なとか、御身を計らむと企てつべきぞ。われは、御身のいみじき力に恐れて、御身を欺かざるを得ざりしなり。われは先づ御身の風囊を鐵線もて、しばり置きぬ、御身、いかで解き得むや、さて、御身は激怒し、三たび、槌をもてわれを打ちぬ、最初のもも、實にわが上に落ち來りせば、以てわが身命を斷つべかりしを、われは、そを迂らせて、只、山を打たせぬ、見たまへ、その山には、いと深うして、巨大なる三つの谷あらむ、そは皆御身が

槌の痕なり。

この外、わが従者となし、事ども、一として欺罔ならざるはなかりき、初めロキは飢<sup>ウ</sup>の化身<sup>ケイ</sup>のやうに、彼の前なる總てのものを食ひぬ、されど、ロキは火なり、さればこそ、肉を盡し、のみなれど、槽をさへも焼き亡し、なれ。

チアルフイが競走せしフギは思想なり、人のこゝろの馳せめぐり、うつりゆく事、いかで、チアルフイの及ぶ所ならむや。

御身が飲み給ひし角盃は、前底海に通ずるものなり

き、御身が飲みし量は、まことに莫大なりき、われ、若し目のあたり、そを見ざりせば、恐くは信ずる能はざりしならむ。海濱に行きても見給へ、御身は、わが言をうけがひ給ふ可き也。また、御身が猫を扛げし業に至りては、誰かは、御身の勇猛力に愕かざらむ。その一足のあがりたる時には、われ儕みなみな、心を寒らしぬ、眞<sup>マコト</sup>は、彼の猫と見えしこそ、地をまくなるミドガルドの大蛇なりけれ、その扛げらるゝや、口と尾と離れむとしたりき。

エルリと力を角べ給ひしも、普通<sup>ツブ</sup>の人の企つべき事

にはあらざりけり。昔より誰か彼の老婆に敵し得しものぞ、エルリは是れ老年の化身なれば也。

今別るゝに臨みていはむ、今より後、御身、わが王國に來むとなおぼしそ、これ、相互の幸福なるべければなり、假令、御身、幾度、來まさむとも、われはまた、他の手段もて御身を欺くべし、御身は得る所なくして、名と力とを失はむ事測り難かるべし。』

と。

トルはこれを聽きて、赫然として、かの鐵槌を揮り上げ、彼を目菟けて、打ち下さむとすれば、今しも見えたるウトガルド、ロキ

は、忽然として消え失せぬ、さらば、この市を破壊せむと再び槌を取り直せば、市も何處にか、かき消えて、只、草茫々たる野原の横はれるあるのみ。



DEATH OF BALDUR.

(1) Hringnir.

(2) Sleipnir.

(3) Gullfaxi.

(十) 土いくさ

(フリングニル)

フリングニル<sup>(1)</sup>は、曾て、八足馬<sup>(2)</sup>、スライプニルと<sup>(3)</sup>グループアシとの功績に就きて、オデインと相争ひし事ありき。後、また、彼は、トルと争を生じ、日を期して、共に戦はむと約しぬ。されど、期日の逼るに随ひ、巨人フリングニルは自ら戦ふを恐れ、その僚友なる巨人の援によりて、巨大なる土塊の巨人を造りたり、その高さ九哩、胸圍三哩、中に牝馬の心臓を置きぬ。フリングニルは、今や土の巨人に、伴はれて、トルの來るを待てり。

トルは、一僕、快走者なるチアルフイを先導として、戦場に立ち向ひ、フルングニルに會し、その楯をもて身を蔽へるを望みて叫んで曰く、楯、何の要あらむや、トル神は地より彼を投げ出すべしと、こゝに於て、フルングニルは楯を投げ棄て、その上に立ち、トル神の來るを待ちぬ、かくて、トルの近づけるを見彼は大なる石棒を振りかざして立ち向ひぬ、トル神は鐵槌を以てこれに對しぬ。

やがて、鐵槌ミエルニルと石棒と相撃ちたるが、ミエルニルの勢ひ強大なりければ、石棒は碎かれ、破片飛んで巨人フルングニルの石の頭蓋に入り、巨人はかくて地に仆れぬ。



その間にチアルフイは犁をもて土の巨人を殺しぬ。されど  
トルも巨人が石棒の破片もて、いさゝかの傷を得たりとなむ

(十一) やとり木

(バルツル)

善神<sup>(1)</sup>バルツル曾て、命、且夕にせまると夢み、乃ち群神に告ぐる  
に實を以てす、神々乃ち相集りて、彼が爲めに、その難を免れし  
めむの謀をめぐらす。此に於てかオデインの妻<sup>(2)</sup>フリツガは、  
水と、火と、鐵と、その外總ての鑛物と、石と、木と、獸類と、禽鳥と、疾  
病と、瘴毒と、總ての匍匐ふものとして、彼を害する事なから  
むと誓はしめぬ、されど、オデインは猶ほこれに鑿らず、フエン  
リス、ヘラ、ミドガルド蛇の母、巨大なる女預言者<sup>(3)</sup>アングエルポー  
デに事を謀らむと思ひ、彼女を求めしが、彼女既に没してこの

世に在らず、因りて之を追ひ、遂にヘラの王國に赴きぬ。  
オデインがこの黄泉への旅路は詩人グレイに歌はれて、うる  
はしき詩篇となりぬ。その詩、初めに曰く、

“Uprose the king of men with speed

And saddled straight his coal-black steed.”

と。

さて、神々は試にバルツルを傷けむとすれど、フレツガにより  
て誓はしめられたる、刀、鎗、斧、鉞、石礫、木片等すべて此の害をも  
與ふる事なかりければ、悪心深きロキは、この光景を見て、いと  
腹立しく、自ら婦人の装をなしてフリツガの宮殿(1)フエンサリ

ルに行きぬ。フリツガはかくとも知らず、その假装せる婦人  
に向ひ、神々は何をなしつゝあるかと問ふ、ロキ答へて言ふや  
う、神々は矢を放ち鎗を飛ばしてバルツルにむかへとも、彼い  
さゝかも害せらるゝ事なしと。

フリツガ、

『さもあるべし、そは、石も棒も何物も、皆バルツルを傷  
くる事なけむと誓ひたればなり。』

ロキ驚きて、

『さても、萬物は、皆、バルツルを害する事なからむと誓  
ひたるか。』

フリツガ答へて、

『さなり、萬物彼を許さむと誓ひぬ、さはれ、プアルハラ  
の東方に生ずる一の小き灌木あり、名を寄生樹とい  
ふ、彼の樹は、素より弱小にして、齒牙に掛くるに足ら  
ざれば、只、彼の木よりのみは、誓約を取らざりき。』  
と。

ロキ、之を聞いて喜び、勇み、宮殿を去りて、故の姿にかへり、かの  
寄生樹を伐りて、神々の集れる處に來りぬ。

この時、神々は、神遊びに、遊びゐたりしが、盲ひたるホーヅルは  
かり、群を離れて、イみたるを、ロキ、その傍に進み、

『御身は何故に物をバルツルに投せざるか。』

ホーヅル、

『われは盲ひたれば、バルツルの在處を辨せず、加之、彼  
に投ぐべき物をも有せず。』

ロキ、

『さらば、こゝに、この枝あり、之を投げて、バルツルに名  
譽を示せよ、われ御身を導いて、彼の處に至るべし。』

と、かくて、ホーヅルは寄生樹をとり、ロキに導かれて、其の處に  
赴き、バルツルに向つて、これを突きしが、彼はこれに刺されて、  
敢なく身まかりぬ、およそ、神の中にも、人の中にも、かゝる悲惨

の死を遂げたるを見しものあらざるべし。

バルヅルが僣れたるを見て、神々は震慄言を發せず、互に目を見かはして、皆、その仇を報ひむと欲するが如し、然れども、かゝる神さびたる齋庭ゆにはなれば、復讐もいかゞにて、たゆたへるならむ。暫くありて、神々は纒に絶叫悶を遣りぬ、さて、フリツガの許につどひ來りければ、女神は聲を放ちて、

『誰かある、<sup>(6)</sup>ヘルに赴きバルヅルをしてハスガルドに歸らしめむの宥をヘラに請ひ來らむ者は、われ、わが愛と好意とを以て、これに報ひるべきなり。』

と、こゝに於て、オデインの子にて、迅速てふ名を得たるヘルモ

ドわれこそ、使命を承らめといふ、かくてヘルモドは、風よりも疾きオデインの駿馬スライブニルに駕し、その使節に出で立ちぬ。

彼は、九日九夜、四圍を辨せざる暗黒の裡に、深谷を涉り、竟(8)にギイオル河岸に達しぬ、こゝに、黄金の光眩き橋あり、人皆これを経て、黄泉に通ふといふ。橋守の一少女、ヘルモドが名と系圖とを尋ね、さて語りて曰く、

『昨日、五人連れの亡者、この橋を渡りしかど、御身一人、程には揺れざりき、しかのみならず、御身の面には、露ほども死の色を見ざるに、何故なればか、ヘルには行

き給ふ。』

と、ヘルモド答ふるく、

『われはバルツルを求むるなり、御身は彼がこの橋を渡りしを見ざりしか。』

少女、

『實にわれ之を見たり、彼が行きつる死者の住處は、彼方にこそ。』

とて、橋よりをちを指しぬ。

ヘルモドは、嚴しく鎖せるヘルの門に達し、こゝにて、馬を乗りすて、緊しく鞍を束ねて、再び之に跨り、刺馬輪をあつれば、いみ

じき勢もて、門を跳び越え、構の内に入りぬ。

彼は、猶ほ、是處より進みて、彼の同胞バルツルが高位置を占むる宮殿に入り、一夜を其處に過し、翌朝、ヘラに會し、いふやう、

『神には皆バルツルの爲めに悲歎の涙にくれをれば、いかで、われと共にバルツルをして、アスガルドに還らしめよ。』

ヘラ、

『われは亦御身が言ふ所の眞か偽りかを試みざるべからず、若し、世にありとあらゆる萬物、生命あるも、生命なきも、彼れバルツルの爲めに泣かば、再び生きて

(9) Thaukt.

還らしむべし、されど、一物だに泣かむ事を拒まば、永く彼をしてヘルに止まらしめむ。』

と、ヘルモド乃ち急ぎ歸りて、かくかくと語る。こゝに於てバルツルをヘラより救ひ出ださむ爲めに、神々は、萬物に號泣せしめむとて、使を四方に發せしかば、萬物、喜んで、その需に應じ、人も、地も、木も、草も、生命あると、生命なきと、ありのことごと、聲を惜まず、慟哭せり、只、<sup>(9)</sup>タウクトといへる老媪、その洞穴裡に籠りて、默然たり、神々の使者、迫つてバルツルのために泣かむ事を求む、されど、老媪は、歌を以て、意を告げ、敢て聽かず。

タウクト、われ、など、バルツルのため泣かめや

(10) Matlew Arnold.

(11) "Balder Dead."

只、聲はりあげて、叫びてあらむ、

ヘラ、こゝろ彼女のもてるものを、固くとりて離さざれ

と。

この老媪は、かのロキが、姿を變じて、神人の間に、害惡を働けるなりと、推し測られき。

かゝりければ、バルツルは、竟にアスガルドに還り來る事能はざりき。

マシユー、アーノルド、かつて、『バルダーの死』と題せる詩を作り、次の如く歌ひぬ。

So on the floor lay Balder dead, and so and

(1) Hringham.

Lay thickly strewn swords, axes, darts and spears,  
Which all the Gods in sport had jilly thrown  
At Balder, whom no weapon pierced or clave :  
But in his breast stood fixt the fatal bough  
Of mistletoe, which Lok the Accuser gave  
To Hoder, and unmitting Hoder threw :  
Gainst that alone had Balder's life no charm.  
And all the Gods and all the heroes came  
And stood round Balder on the bloody floor  
Weeping and wailing : and Valhalla rang

Up to its golden roof with sobs and cries ;  
And on the table stool the untasted meats,  
And in the horns and gold-rimmed skulls the wine :  
And now would night have fallen and found them yet  
Wailing : but otherwise was Odin's will."

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

バルツル、既に死し、神々はその屍をとりて海岸に運べり、時に  
岸頭バルツルの船<sup>(1)</sup>フリングハムの繫がれたるを視る、この船  
は人以て世界の最大船となせるものなり。

(2) Nanna.

(3) Gullinbursti.

(4) Gulltopp.

かくて、バルツルの屍船に運ばれ、次いで臺上に安置せらる、彼の妻<sup>(2)</sup>ナンナこの様を見て、心臓破れ、こゝに亦彼女の屍も、バルツルと同じき材の上に焚かれぬ。

およそ、バルツルの葬式に列するものその數を知らず、先づ、オーディンは、フリツガ、フアルキリオル及び鴉に伴はれ、次にフレ<sup>(3)</sup>ーは、グウリンブルスチてお牡猪の牽ける車に駕し、ハイムダ<sup>(4)</sup>ルはその馬<sup>(4)</sup>グルトツプに跨り、フレヤは猫の牽ける戦車に乗り、その外、霜の巨人、山の巨人等總て數ふるに違あらず、バルツルの馬は、た、美しき装をなして、主人と共に同じ火に焚かれたりき。

\* \* \* \* \*

バルツルをして死に至らしめて、悔いざるのみか常に神人の間に立ち、様々の害悪を試みるロキは、曩に一たび神々のために、癒せられむとせしが、神の齋庭<sup>ウツ</sup>を潰さむも、その恐なきに非ずとて、ゆるされしが、彼れ自らも、さすがに、怯づる所やありけむ、竊に、とある山中に遁れ、こゝに隠れて、用心怠りなく、四方、皆、戸を有する小亭を造り、危ぶみながら日を送りぬ。彼、この山中の隠れ家に在りて、日を送る程に、閑なる餘り、魚を捕ふる網を發明し出でぬ、漁者が網を用ひる事、この時より始



まるといふ。

かく、ロキは人里遠く、隠れ潜むと雖も、オデイン遂に彼を覓ぎ求めつゝ、在處あちかを示して、神々に逮捕の命を傳へぬ。

ロキは自ら免るゝ能はざるを知り、形を變じて鮭となり、小川の石の間はさまにかくれぬ、神々乃ち、彼が作りし網を取りて、小川に入れしかば、ロキは將に網を跳り越えむとせり。然れども、トルは尾を以て彼を捉へ、壓迫せしかば、それよりして後、鮭は扁平にして甚だ薄くなりぬといふ。神々等は、彼を鎖に繋ぎ、その頭上に蛇を懸けたり、蛇の毒汁、滴々として、彼が顔に滴りしかば、ロキの妻、シグナその傍に座し、盃を以て、之を受けぬ、され

ど間もなく毒汁盃に満ちたれば、妻はそを打ちあけむとて、彼方に運び去りし隙に、毒の滴、ロキの上に落ち來りぬ、この時、彼は恐るゝ事甚しく、身をもたえつゝ、叫びしが、ために、大地震ひゆるぎて、世にいはゆる地震となりぬとなむ。

## (十二) 明暗

(エルフェス)

神よりは劣れれども、なほ、いみじき権力を有するものあり<sup>(1)</sup>。エルフェスといふ、白き靈、即ち、光のエルフェス等は、甚だ、壯麗にして、その光輝、太陽よりも強く、華美にして透明なる織物の衣服を着す、彼等は光を愛し、これを人類にも賦與す、また彼等は、麗しき、愛らしき小兒として表さるゝなり。

彼等の國はアルフハイムと稱せられ、太陽神フレールの配下<sup>(2)</sup>にあり、而して、その光の下に戯れ遊ぶなり。

黒き靈、即ち、夜のエルフェスは光のエルフェスとは、全然異なる

りたるものにして、汚れたる蒼色の醜惡なる長鼻の矮奴なり、彼等は、只、夜のみあらはれ、思み怖るゝ敵は太陽なりとす、若しその光線、些なりとも彼等の上に落ちむか、彼等は直に石に變せらるべければなり。

彼等の言語は寂寞の反響にして、彼等の住居は、地下の洞穴なり、彼等はイミルの體の腐肉より生じたる蛆となりて成存し、その後に至り、神は人の形と、大なる理解力とを賦與したりき、彼等は、殊に、自然の秘密なる力を知るの能力にすぐれ、また、ルニツク文字を以て彫刻し、これを説明するなり。

彼等は、最も熟練なる技術家にして、礦物と木とをその材に用

ひる。その製作品中にて、名を得たるものは、曰く、トルの楫、曰くフレエールのスキドブライッドニル船これ也、この船の構造は、いとも不思議にして、その大能く神々の武具と家什とを搭載して、なほ、餘地を存すべし、されど、之を燃む時は、能く、之を懐にし得べしといふ。

(十三) 世の終り

世の終りて、お思想は、北方の國民、また、之を有す、總て、造られて成りしもの、見る事を得べき、フアルハラ、ニッフレハイムの神々、アルハイムの住民は、た、ミドガルドも、その住民も、共に滅亡すべき日、来る可しと信せらるゝ也。

さはれ、世の終らむとするや、必ず、その前兆なくばあらず。先づ、三つの冬、相重なりて來り、その程は、皚々たる白雪、絶えず天の羅より降り、霜嚴しう寒風すさみ、天氣おそろしく、太陽は其光を放つことなかるべし。この三冬の間には、一夏も來る事なく、續いて他の三重の冬となるべし、この冬期には、戦争と

- (1) Musperheim.  
 (2) Surtur.  
 (3) Figrid.

不和と宇宙の至る處に擴り、地は驚きて震ひ、海は充ちて溢れ、諸々の天は裂け、人は殺され、空の鷲來りて人の肉を啄むべし。」「  
 狼、フエンリスはその縛を破り、ミドガルドの蛇は海の棲處を  
 離れ、ロキはた縛を解きて、神々の敵に伴ふべし。

かく、有りとある禍、あらぶる中にも、ムスベルハイムの子等、尤  
 も烈しかるべし、前も後も、炎々たる烈火を以て、取り捲かるゝ  
 ズルツルを首として、虹橋ビフロストに進み來り、馬蹄にかけ  
 て橋を碎き、フイグリーットの戰場に向ふべし、こゝに押し寄せ  
 來らむ者どもは、狼フエンリス、蛇ミドガルド、ロキのともがら  
 は、ヘラの從者等と霜の巨人等とを率ゐて、潮の如くに襲はむ

- (4) Giallar.  
 (5) Vidur.

なり。ハイムダルは、立ち出で、ギアルラル角笛を吹き鳴し、  
 争闘のために、神々と勇士とを集むべし、神々はオデインに導  
 かれて現れ來り、先づフエンリスと戦ひ、終に怪物のために殺  
 ざるべし。これを見たるオデインの子、フイダルは進みて、フ  
 エンリスを殺戮すべし、かくて、トルはミドガルド蛇を討ちぬ  
 とて、譽れを得る程に、垂死の毒蛇にまつはれ、窒息し、ロキとハ  
 イムダルとは、互に刺しちがへて、死すべし。

神々とその敵とは、相互に、討ちつ討たれつ、果ては、ズルツル、そ  
 の敵フレエールを殺し、世界に火焰を投じ、全宇宙を、炎の中に  
 捲き入るべし。太陽は光を失ひ、地は洋に沈み、星は天より墮

ち、時もわかずなるべし。  
さて、かくて後、アルファツル、こゝろは全能者、といふもの、新し  
き天と、新しき地とを創め、地は夥多の産物を出し、勞なく、苦な  
くして、菓物を生ずべし。こゝに悲哀と、害悪とは絶えて、神と  
人と、共に、幸福に生活すべし。  
これを、北歐の國民が世の終りに對する想像なりとす。

譯  
終

明治三十五年八月十日印刷  
同 三十五年八月十五日發行

定價貳拾五錢

不許複製

編者	赤司 嶸花
編者	石田 春風
發行者兼	金港堂書籍株式會社 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者	右社長 原 亮一 郎
印刷所	會社 東京國文社 東京市京橋區宗十郎町十五番地
發捌所	各府縣特約賣捌所

82

506

◎歐 羅 巴 池邊義象氏著 定價壹圓八拾錢

◎文藝叢書 氣 焔 錄 登張文學士著 定價參拾五錢

◎文藝叢書 北州考及端唄評釋 如電 雪著 定價拾 五 錢

◎漫筆紀行 したわらび 大和田建樹氏著 定價五 拾 錢

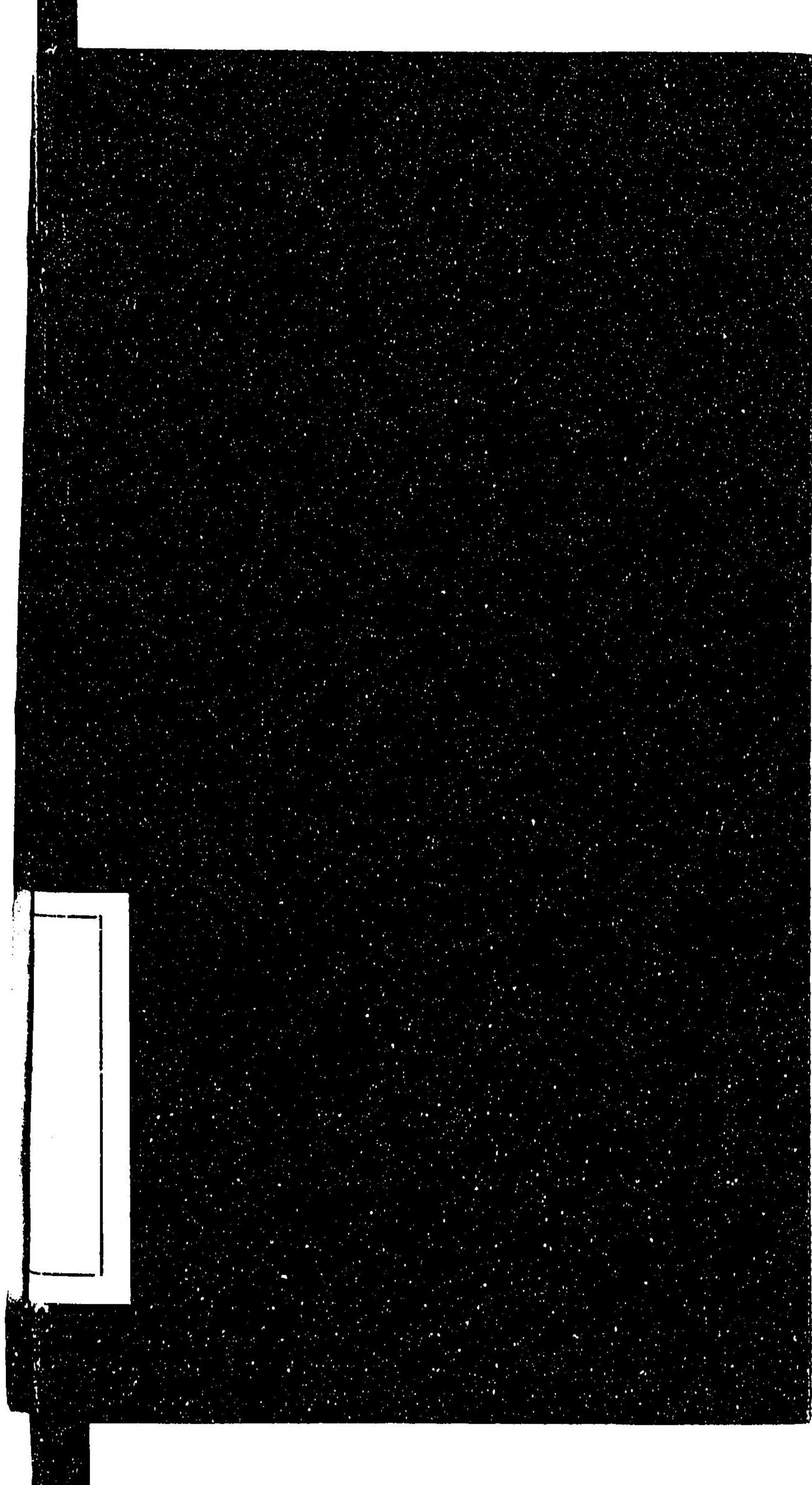
◎人 生 の 快 樂 本田信教氏譯 定價六 拾 錢

◎日 本 繪 畫 史 横井文學博士著 定價七 拾 錢

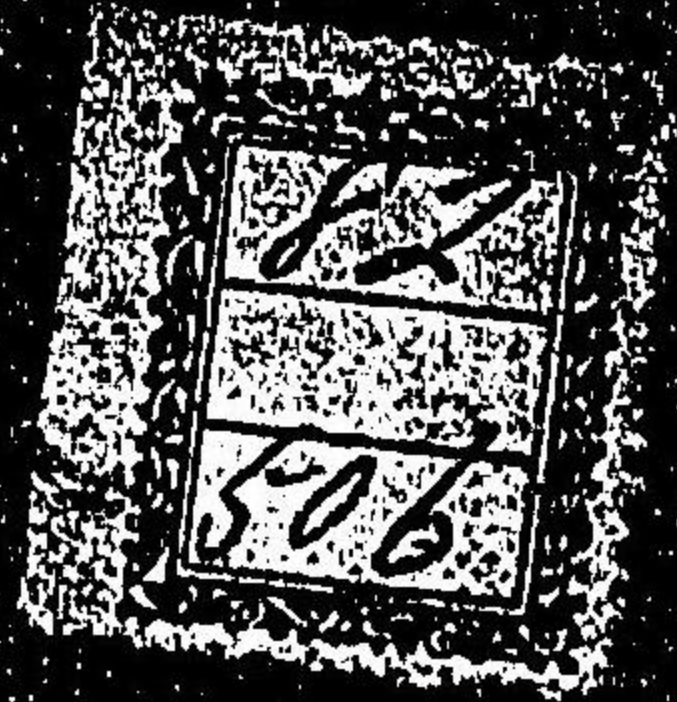
◎詩 聖 ダン テ 上田文學士著 定價八 拾 錢

◎も と の し づ く 花圃女史著 定價壹圓參拾錢

82
555







013765-000-8

82-506

霹靂 ( 北欧神話 )

赤司 繁太郎

石田 元季 / 編

M35

ABA-0254

